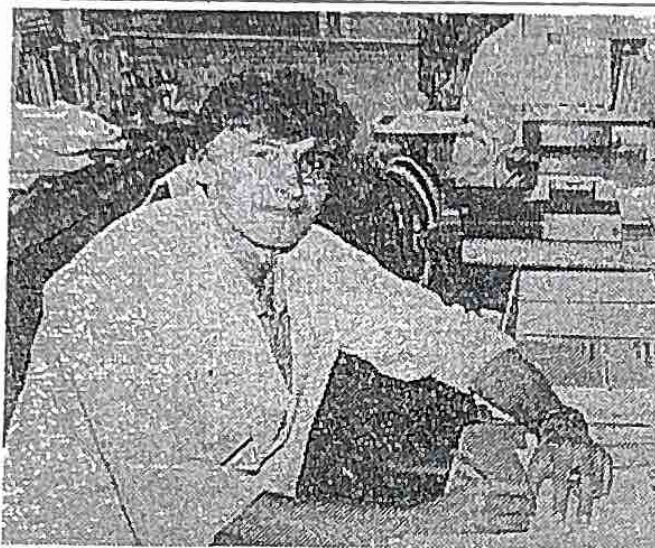


1993.9.22

(4)



「秋田で学んだことを祖国で役立てたい」と語る
ゲンナチーさん（秋田大医学部第一外科医局）

1993.9.22

「学んだことを生かす」

ベラルーシ共和国の医師・ゲンナチーさん

秋大 医学部 研修期間終え帰国

県費留学生として秋田大医学部で研修していたベラルーシ共和国（旧ソ連・白ロシア共和国）の医師ゲンナチー・トゥールさん（32）が約一年の研修期間を終え、二十二日、本県を離れた。ゲンナチーさんは「有意味な一年間だった。秋田で学んだことを祖国で生かしたい」と語った。

ベラルーシ共和国の医師・ゲンナチーさんは、ミンスク市立腫瘍（しゅよう）学病院の外科医で、消化器がんが専門。ベラルーシではチェルノブイリ原発事故後、被ばく者の甲状腺（せせん）癌、肺、消化器などが発生率が上昇、放射能汚染が深刻な状況。昨年十月の来県後は、同大第一外科（小山研二教授）で各部位のがん治療、手術について臨床的に学んだほか、大腸がんを材料に核DNA損傷に関する研究をしてきた。

「先進的な治療、研究に接し、とても勉強になった。集団検診のシステムには学ぶところが多く、帰国後はそのノウハウを取り入れた」とゲンナチーさん。この一年で六編の論文を執筆したほか、市立秋田総合病院などに足を運び、精力的

に臨床技術を吸収した。帰国前日の二十一日も、本荘第一病院で手術を見学後、秋田市にとんぼ返りする慌ただしさだった。

私生活では囲碁、空手、合気道に熱中した。また太平山、鳥海山への登山も体験。ベラルーシには山がないため、登山初体験となった。「鳥海山から見た夕日の美しさは一生忘れられないだろう」と、本県の自然の美しさも印象に残った様子だった。

同じベラルーシからは四月から、同大の小児科へスウェットラーナ・テンさん（32）、麻酔科へホリアグ・サチシユルさん（30）の二医師が県費留学している。